

コロナ禍における初年次教育科目のオンライン授業の設計と実践

－ 新入生セミナー A (教育学部) での取り組み－

仲道 雅輝¹⁾, 玉井 輝之²⁾, 井上 昌善²⁾, 村田 晋也¹⁾

1) 愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室

2) 愛媛大学教育学部

Design and practice of online lessons for first-year education subjects in COVID-19

－ Efforts at Freshman Seminar A (Faculty of Education) －

Masaki NAKAMICHI¹⁾, Teruyuki TAMAI²⁾, Masayoshi INOUE²⁾ and Shinya MURATA¹⁾

1) Office for Educational Planning and Research, Institute for Education and Student Support, Ehime University

2) Faculty of Education, Graduate School of Education, Ehime University

1. はじめに

1.1. 背景

2020年2月以降の、国内での新型コロナウイルス感染症拡大を受けて、全国の大学が対面授業を中止し、オンライン化することで感染の拡大を防止する対応をとった。愛媛大学においても、在学生の授業はすべてオンラインとなり、大学構内への立ち入りが禁止された。新年度になっても状況は変わらず、新入生は、学内に一度も立ち入ることがないまま前学期授業が開始され、その後もオンラインのみでの授業が継続されることとなった。

今回報告する「新入生セミナー A」は、1年次前学期の必修科目であり、新入生が、大学での学習を円滑に開始できるよう工夫され、各学部の特徴に合わせた授業内容となっている。

教育学部では、学生が生活習慣、学習習慣を身に付けるスタートラインにいる時期であるためスムーズな大学生活のスタートができるようにすること、学生間の交流や助け合いの機会をつくること、大学での居場所の確保(帰属意識)、質問や不安を相談しやすい学習環境の提供、および学生と教員とのつながりを意識した授業を目指した。また、この授業は、アカデミックスキルの獲得に加え、グループワーク等により友人づくりの場を提供するなど、高等学校から大学への移行を支援する意味合いも大きい。

このような意味をもつ当該授業について、教育学部の新入生セミナー A を担当する教育学部の教員と、同じく授業を担当し授業設計を専門とする教育企画室教員で協議し、オンライン授業をより効果的なものにするための学習支援について立案・実施した授業実践について報告する。

1.2. 目的

コロナ禍により、大学での対面授業が制限される中での新入生の移行支援と、アカデミックスキル・学習習慣の獲得のためのオンライン授業のあり方について検討した。検討により見出した授業実践の工夫、学生の反応について整理・省察し、今後の授業実践の指針を得る。

2. 方法

2.1. 科目の概要

本科目は、1年次前学期開講の共通教育科目であり、必修科目2単位に該当する。履修登録者数は165名である。

授業目的は、

- 1) 大学における学修を充実させるために必要なスタディ・スキルの習得を進める。
- 2) 大学における人間関係、社会性を涵養するためにメンタルヘルス、コミュニケーション・スキルおよびソーシャル・スキルについて学ぶ。

表 1 新入生セミナー A (教育学部) の授業スケジュールの変更

回	2020 年度当初授業計画 (予定)		変更後の授業計画 (実施)	
	対面授業 (月曜 1 限)		オンライン授業 (同期型 / Zoom, 非同期型 / Moodle)	
1 回	4/13 (月)	・ ガイダンス ・ コミュニケーション・スキルズ (教育企画室)	4/22 (水) ~ 24 (金)	・ ガイダンス (Moodle)
2 回	4/20 (月)	・ 学びのすすめ I (教育企画室)	4/27 (月) ~ 29 (水)	・ 観察実習事前ガイダンス (Zoom & Moodle)
3 回	4/27 (月)	・ レポートを書こう (教育企画室)	4/27 (月) ~ 5/6 (水)	・ 学びのすすめ I (教育企画室) (Moodle)
4 回	5/11 (月)	・ 観察実習事前ガイダンス ・ 情報を検索しよう (図書館)	5/11 (月) ~ 13 (水)	・ レポートを書こう (教育企画室) (Moodle)
5 回	5/18 (月)	・ プレゼンをしよう (教育企画室)	5/18 (月) ~ 20 (水)	・ 情報を検索しよう (図書館) (Moodle)
6 回	5/25 (月)	・ 教育実践体験に必要なマナー (外部講師)	5/25 (月) ~ 27 (水)	・ プレゼンをしよう (教育企画室) (Moodle)
7 回	6/1 (月)	・ 観察実習直前ガイダンス	6/1 (月) ~ 3 (水)	・ コミュニケーション・スキルズ (教育企画室) (Moodle)
8 回	6/8 (月)	・ 附属小学校観察実習 I ・ 附属中学校観察実習 I	6/8 (月) ~ 10 (水)	・ 大学生が知っておきたいワークルールと ボランティア (愛媛労働局) (Moodle)
9 回	6/15 (月)	・ 附属小学校観察実習 II ・ 附属中学校観察実習 II	6/8 (月) ~ 14 (日)	・ 観察実習直前ガイダンス (Zoom & Moodle)
10 回	6/22 (月)	・ 附属小学校観察実習省察 ・ 附属中学校観察実習省察	6/15 (月) ~ 17 (水)	・ 小学校観察実習 I (Zoom & Moodle) ・ 中学校観察実習 I (Zoom & Moodle)
11 回	6/29 (月)	・ アクティブ・ラーニング (教育企画室)	6/22 (月) ~ 24 (水)	・ 小学校観察実習 II (Zoom & Moodle) ・ 中学校観察実習 II (Zoom & Moodle)
12 回	7/6 (月)	・ 学びのすすめ II (クリティカル・シンキング) (教育企画室) ・ 大学生が知っておきたいワークルールと ボランティア (愛媛労働局)	6/29 (月) ~ 7/1 (水)	・ 小学校観察実習省察 (Zoom & Moodle) ・ 中学校観察実習省察 (Zoom & Moodle)
13 回	7/13 (月)	・ 男女共同参画社会を実現しよう	7/6 (月) ~ 8 (水)	・ アクティブ・ラーニング (教育企画室) (Moodle)
14 回	7/20 (月)	・ 消費者教育 (金融トラブルの備え)	7/13 (月) ~ 15 (水)	・ 男女共同参画社会を実現しよう (Moodle)
15 回	7/27 (月)	・ 大学生が注意すべき犯罪について (ストーカー, デート DV, 交通安全)	7/20 (月) ~ 22 (水)	・ 学問のすすめ II (クリティカル・シンキング) (教育企画室) (Moodle)
16 回	—	—	7/27 (月) ~ 29 (水)	・ 教育実践体験に必要なマナー (外部講師) (Moodle)
17 回	—	—	最後に	・ 大学生が注意すべき犯罪について (ストーカー, デート DV, 交通安全, 金融トラブルの備え等) (Moodle) ・ 新入生セミナー A の授業アンケート (Moodle)

3) ノートの取り方, 文献検索方法, レポートの作成およびプレゼンテーションの技法等について実践的に学ぶ。

4) 観察実習を通じて授業や児童の活動を観察し, 教員としての活動の一端に触れるとしている。

また, 授業の到達目標は,

- 1) 履修に必要な基礎的知識・各種スキル・態度を習得する。
- 2) 文献検索を行うことができ, レポート作成およびプレゼンテーション・スキルを学習する。
- 3) 自らが志向する教員のイメージを把握し, 教員としての目的意識を持つことができるとしている。

成績評価方法は, 毎時間, 授業終盤にレポートを課すとともに, 観察実習に対する省察, 報告を評価対象としている。科目担当は, 教育学部の教員が中心となり, 教育企画室, 図書館, 外部講師等の教育協力者で, オムニバス形式で実施している。

2.2. 授業方法の実際

2.2.1. オンライン授業で用いる教材開発

科目の学習目標は変更せず, 対面授業と同じ内容を各授業回の到達目標に応じて, 教材の形式を選択し開発した。授業用のテキストである「愛媛大学版 大学での学び入門」と併用して学習できるオンデマンド形式の教材を愛媛大学の学習管理システム (LMS; Moodle) 上に配置し, 期間を定めて配信した。教材の形式は, 非同期型で用いた動画教材 (図 1), 音声教材 (図 2), 実践動画教材, PDF テキスト教材および, 同期型で用いた Web 会議システム (Zoom) 等である。これらオンデマンド教材と, 学生の手元にあるテキスト教材の併用により, 予習復習を促し, 自己学習しやすいように授業を構成した (Bersin, J. 2006)。さらに, オンデマンド教材には多様な形態のものを準備 (動画, PDF, 音声付き PowerPoint® 等) することで, 学習目標に合致した教材, もしくは学生の状況にあった教材の

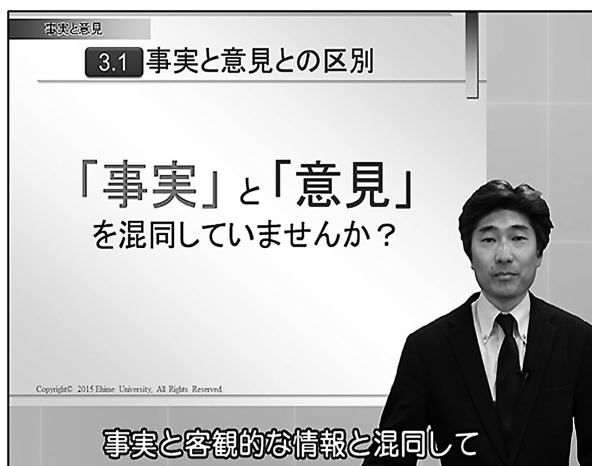


図1 「レポートを書こう」授業教材

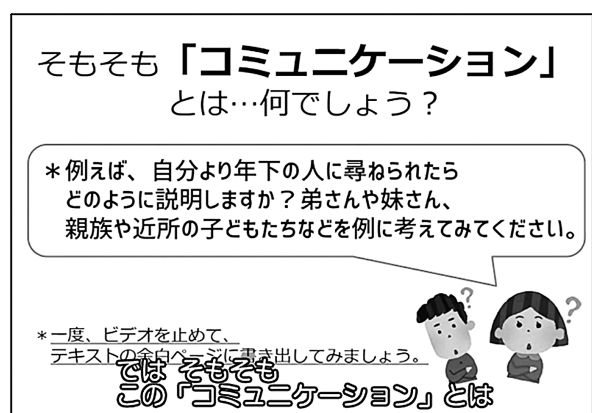


図2 「コミュニケーション・スキルズ」授業教材

提供を可能にした（鈴木 2004）。16 回目の授業である「マナー講座」では、学校での場面を想定して、お辞儀の仕方や電話の掛け方等社会人として必要なマナーについて学習する。そのため、遠隔授業を受けている場所でも実際の場面を想定した体験ができるように、先輩学生が見本となり体験をしている動画教材を活用した。特別な配慮を必要とする学生への対応として、動画教材すべてに愛媛大学バリアフリー推進室の協力を得て字幕テロップを付けた。

配布資料は、Moodle コース上にダウンロード可能な形で掲載した。また、動画教材を使用する場合は、視聴時間が3～7分程度となるよう細かく分けて編集し配置した。

授業動画の配信にあたっては、学生の視聴時の情報量負荷が最小となるよう、また多様な視聴環境に対応可能とするため、「XMedia Recode3.4.4.8」ソフトウェアを用いて、ビットレートを1500Kbps程度に圧縮したMP4形式にした。

授業動画の格納先については、YouTubeへのアップロードも検討したが、コンテンツ内の著作物が第三者のものであり、使用許諾を得た時点では、学内限定のMoodleコース内で履修学生のみが視聴することを条件に許諾を受けたため、YouTubeへのアップロードは見合わせた。そのため、授業動画は愛媛大学のOneDrive®内に保管し、Moodleコー

ス上にリンクを貼ることで、Moodle上に保存することによる容量の増加を避けるように工夫した。

2.2.2. オンライン授業への適応支援

オンライン授業開始前に、Moodleコースにログインできるように修学支援システム内に「Moodleコース受講マニュアル（PDF）」を掲載するとともに、ログイン操作を行うことを最初の課題として提示し、Moodleコースに全員がログインできたことを確認した。ログインしていなかった学生に対しては、教職員が個別に電話によるフォローアップを行った。OneDrive®やZoomについても授業で初めて利用する場合には同様の対応を行った。これにより、オンライン授業に不慣れた学生のコンピューターの操作や通信環境などの理由での欠席がないように支援した。同時に人的交流の少なさに起因する大学生活への適応困難感を抱える学生の早期発見・早期支援につなげるよう配慮した。

対面授業のように、その時その場でというような、時機をとらえた質問がしにくいことが予想されるため、Moodleコース内に科目に関連する質問内容の問い合わせ先と、Moodleの操作および体系的な質問の問い合わせ先を分け、メールアドレスと連絡先電話番号を示し、困ったときにどこに相談すればよいのかをすぐに見つけられるように工夫した。

2.2.3. 適切なフィードバック

オンライン授業においては、愛媛大学学則第22条2項の規定にある「多様なメディアを高度に利用して行う授業」については、文部科学省告示第百十四号（平成19年7月31日）に規定される次の条件を満たす必要がある。そこには、「①インターネットなどを利用することにより、文字、音声、静止画、動画などの多様な情報を扱うもの。あわせて、次の②または③いずれかの条件を満たす必要がある。②同時かつ双方向に行われる授業であること。③非同期型（オンデマンド型）の授業については、インターネットその他の適切な方法を利用することにより、十分な指導を行うことができること。かつ、学生等の意見交換の機会が確保されていること。」とあり、今回のオンライン授業においては、それらを順守した授業設計を行った。具体的には、毎回の授業で質疑応答のコーナーを設けた。また、レポート等の提出物へのフィードバックとしては、まず、課題を締め切りに提出できていない学生には、その旨と機器や通信環境の不具合の場合は担当教員へ連絡するように修学支援システムで連絡した。そして、授業回ごとに授業に対するコメントを担当教員がMoodle上に掲載した。このように、学生とのやり取りを増やすことにより、学生・教員間のつながりを密に保てるように工夫した。さらに、レポート等へのフィードバックは、親しみやすい表

現や簡潔な文章とし、学生側の読みやすさにも配慮することで、質疑応答を行いやすいように配慮した。

2.2.4. 学習習慣の形成

本科目は、新入生が大学での授業を受け始める段階で受講するため、学習習慣の形成や大学生生活への円滑な適応に配慮する必要がある。そのため、対面授業と同じ月曜日1限目(8:30)頃に授業開始の挨拶や課題の締め切り日など授業概要について修学支援システム(愛媛大学履修システム)で連絡をした。そして、Moodleコース内に置かれた決められた期間内に受講する非同期のコンテンツによる授業を受講するように設計した。

また、学習推奨期間を予め提示することで、学生自身により学習計画が立案し自己管理できるように促す効果を狙った。

3. 結果

取り組みの結果、新入生セミナーA(教育学部)受講生165名全員の単位を認定することができた。以下に、アンケート結果について述べる。

3.1. 受講学生へのアンケート調査(選択式)

アンケート項目は、21項目からなり、項目1はオンライン授業の受講場所に関する質問、項目2は遠隔授業で使用した機材に関する質問、項目3から8は授業方法に関する質問、項目9から13は学生自身の授業への積極性に関する質問、項目14から19および21は授業内容等に対する満足度に関する質問、項目20は学習の習慣化に関する質問とした。

最終回に、Moodleコースにリンクを貼り、Microsoft Forms[®]によるアンケート調査を行った。アンケート調査への協力は任意であり、学業成績とは無関係であること、不参加や途中辞退により不利益を被ることはないこと、個人が特定されないよう情報は適切に取り扱うこと、成果は論文等で公開すること等について、アンケート調査画面の冒頭に文章で説明し、回答の送信をもって同意とすることを表記した。得られた回答をMicrosoft Forms[®]からCSV形式で取り出し、Microsoft Excel[®]を用いて集計した。

新入生セミナーAの受講学生165名中回答者は141名であった(回答率85.5%)。

3.1.1. オンライン授業の受講場所(複数回答)

オンライン授業の受講場所は、愛媛県内の自宅(実家)が最も多く76件であった。続いて、下宿(アパート・マンション)61件、愛媛県内外にある自宅(実家)26件、学生宿舎・学生寮6件、大学1件であった。

3.1.2. オンライン授業で使用した機材(複数回答)

学生がオンライン授業で使用した機材は自分で所有するパソコンが最も多く137件であった。続いて、スマートフォン34件、家族と共有パソコン7件、タブレット端末(iPad等)4件、大学から貸与されたパソコン2件であった。

3.1.3. 授業方法に関する質問への回答

授業方法に関する質問は、授業方法に対して「よかった、まあよかった、どちらでもない、あまりよくない、よくない」の5肢択一で回答してもらい、質問により「該当せず」を設けた(図3)。

『3. オリエンテーションでは、Moodleコース受講マニュアル等が就学支援システムにより配布され、Moodleコースへ入るためにアクセスする練習の機会が設けてあったこと』については、「よかった」81名(57.4%)、「まあよかった」42名(29.8%)、「どちらでもない」16名(11.4%)、「あまりよくない」1名(0.7%)、「よくない」1名(0.7%)であった。

『4. 授業を受講できていない学生への修学支援システムや電話掛けによるサポート』については、「よかった」31名(22.0%)、「まあよかった」14名(9.9%)、「どちらでもない」9名(6.4%)、「あまりよくない」0名、「よくない」1名(0.7%)「授業を受講できたため該当しない」は86名(61.0%)であった。

『5. 課題の提出期限を朱書きにてコース内に目立つように記載されていたこと』については、「よかった」110名(78.0%)、「まあよかった」22名(15.6%)、「どちらでもない」4名(2.8%)、「あまりよくない」4名(2.8%)、「よくない」1名(0.7%)であった。

『6. 学習推奨期間が提示されていたこと』については、「よかった」86名(61.0%)、「まあよかった」37名(26.2%)、「どちらでもない」16名(11.3%)、「あまりよくない」2名(1.4%)、「よくない」0名であった。

『7. 決まった時間、毎週授業時間(月曜日1限)に授業について連絡したこと』については、「よかった」112名(79.4%)、「まあよかった」19名(13.5%)、「どちらでもない」8名(5.7%)、「あまりよくない」2名(1.4%)、「よくない」0名であった。

『8. 振り返りシート提出を受け、教員から全体へのコメントやフィードバックがあったこと』については、「よかった」102名(72.3%)、「まあよかった」30名(21.3%)、「どちらでもない」7名(0.5%)、「あまりよくない」2名(1.4%)「よくない」0名であった。

3.1.4. 学生自身の授業への積極性に関する質問への回答

学生自身の授業への積極性に関する質問は、授業に対して「積極的、ある程度積極的、どちらでもない、あまり積極的でない、積極的でない」の5肢択一に加え、質問によ

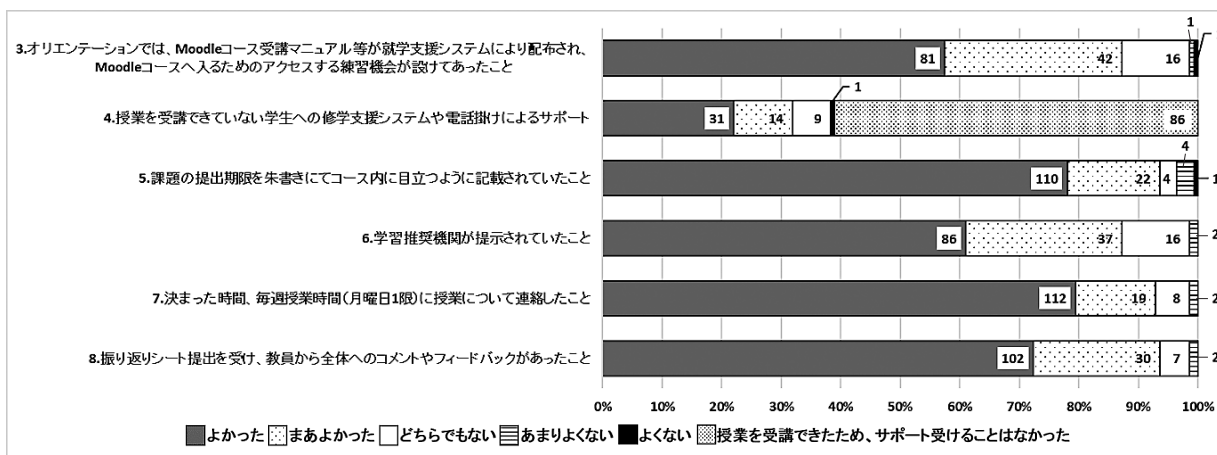


図3 授業方法に関する質問への回答

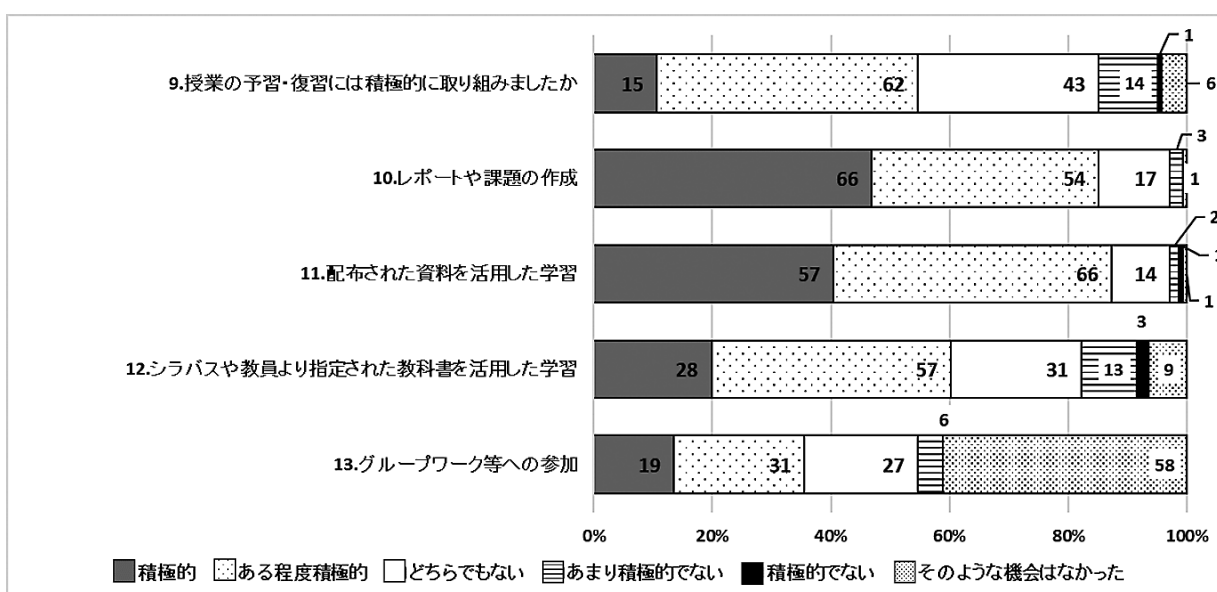


図4 学生自身の授業への積極性に関する質問への回答

り「そのような機会は無かった」を設けた(図4)。

『9. 授業の予習・復習には積極的に取り組みましたか』については、「積極的」15名(10.6%),「ある程度積極的」62名(44.0%),「どちらでもない」43名(30.5%),「あまり積極的でない」14名(9.9%),「積極的でない」1名(0.7%),「そのような機会は無かった」6名(4.3%)であった。

『10. レポートや課題の作成』については「積極的」66名(46.8%),「ある程度積極的」54名(38.3%),「どちらでもない」17名(12.0%),「あまり積極的でない」3名(2.1%),「積極的でない」0名,「そのような機会は無かった」1名(0.7%)であった。

『11. 配布された資料を活用した学習』については、「積極的」57名(40.4%),「ある程度積極的」66名(46.8%),「どちらでもない」14名(9.9%),「あまり積極的でない」2名(1.4%),「積極的でない」1名(0.7%),「そのような機会は無かった」1名(0.7%)であった。

『12. シラバスや教員より指定された教科書を活用した

学習』については、「積極的」28名(19.9%),「ある程度積極的」57名(40.4%),「どちらでもない」31名(22.0%),「あまり積極的でない」13名(9.2%),「積極的でない」3名(2.1%),「そのような機会は無かった」9名(6.4%)であった。

『13. グループワーク等への参加』については、「積極的」19名(13.5%),「ある程度積極的」31名(22.0%),「どちらでもない」27名(19.1%),「あまり積極的でない」6名(4.3%),「積極的でない」0名,「そのような機会は無かった」58名(41.1%)であった。

3.1.5. 授業内容等に対する満足度に関する質問への回答

『14. 授業内容や難易度』については、「満足」60名(42.6%),「ある程度満足」65名(46.1%),「どちらでもない」10名(7.1%),「あまり満足していない」4名(2.8%),「満足していない」2名(1.4%)であった(図5)。

『15. 教科書や配布資料(PDF等)の内容や形式』について

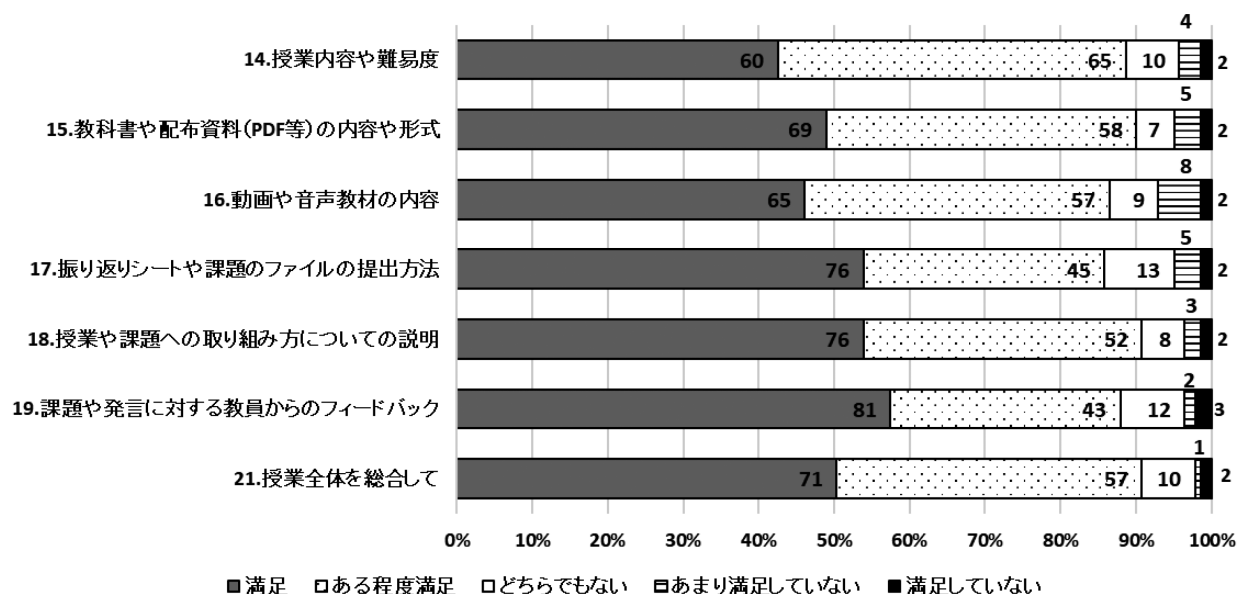


図5 授業内容等に対する満足度に関する質問への回答

(41.1%), 「どちらでもない」7名(5.0%), 「あまり満足していない」5名(3.5%), 「満足していない」2名(1.4%)であった。

『16. 動画や音声教材の内容』については、「満足」65名(46.1%), 「ある程度満足」57名(40.4%), 「どちらでもない」9名(6.4%), 「あまり満足していない」8名(5.7%), 「満足していない」2名(1.4%)であった。

『17. 振り返りシートや課題のファイルの提出方法』については、「満足」76名(53.9%), 「ある程度満足」45名(31.9%), 「どちらでもない」13名(9.2%), 「あまり満足していない」5名(3.5%), 「満足していない」2名(1.4%)であった。

『18. 授業や課題への取り組み方についての説明』については、「満足」76名(53.9%), 「ある程度満足」52名(36.9%), 「どちらでもない」8名(5.7%), 「あまり満足していない」3名(2.1%), 「満足していない」2名(1.4%)であった。

『19. 課題や発言に対する教員からのフィードバック』については、「満足」81名(57.4%), 「ある程度満足」43名(30.5%), 「どちらでもない」12名(8.5%), 「あまり満足していない」2名(1.4%), 「満足していない」3名(2.1%)であった。

『21. 授業全体を総合して』については、「満足」71名(50.4%), 「ある程度満足」57名(40.4%), 「どちらでもない」10名(7.1%), 「あまり満足していない」1名(0.7%), 「満足していない」2名(1.4%)であった。

3.1.6. 学習の習慣化に関する質問への回答

学習の習慣化に関する質問は、「そう思う, ある程度そう思う, どちらでもない, あまりそう思わない, そう思わない」の4肢択一で回答してもらった。

『20. 大学の導入科目として, 毎週月曜1限目に開講されたことは, 学習の習慣化につながったと思いますか』については、「そう思う」44名(31.2%), 「ある程度そう思う」56名(9.7%), 「どちらでもない」17名(12.1%), 「あまりそう思わない」15名(10.6%), 「そう思わない」9名(6.4%)であった(図6)。

3.2. 受講学生へのアンケート調査(自由記述式)

次の2問について, 自由記述式で回答してもらった。

3.2.1. 特に受けてよかったと思う授業

「本講義の中で, 特に受けてよかったと思う授業について

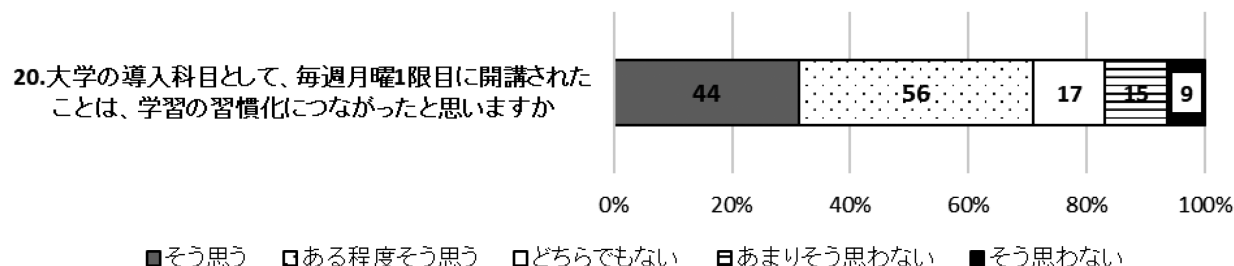


図6 学習の習慣化に関する質問への回答

での意見を記入してください（よかったと思う理由も含めて記入してください）」については、141名全員の記入があった。小・中学校の授業の動画を閲覧し、教員の立場で考察した観察実習に対して、「実際に授業を観察することにより、先生の見習いたい点やマネしたい点を見つけることができ、今後の実習や活動に活かしていきたいと思った」、「実際に自分の目で見てみないと頭の中で自分が教員になっているイメージができなかつたりしたので、この授業によって自分の将来について考えることができた（以下略）」等の記述があった。「レポートを書こう」と題した授業回に対して、「レポートの書き方を最初の方で教えていただいたので、他の講義でも使うことができた」、「大学生になっても何もわからないままレポートを書かなければならなかったのが、早めの時期に書き方がわかってよかった」、「大学に行く機会がなかったため、わからなくても直接先生に聞くことも、同じ学部の子を頼ることもできなかったのが、授業で詳しく説明して下さったおかげで理解することができた」などの記述があった。「教育実践体験に必要なマナー」と題した、社会人として必要なマナーについて学習する授業回に対して、「これからあると思われる教育実習の際に、実践できる立ち居振る舞いや電話のかけ方について学ぶことができたから」、「マナーの授業は大学生活そして社会に出てからも大きく役立つことなのでとてもよかった」、「先輩を招いていたことや、画面越しでもできる実践練習が多く設けられていたため、楽しみながらでき、かつ分かりやすかった」などの記述があった。

3.2.2. 授業について教員の対応でよかったこと

「授業についての教員の対応としてよかったと思うことがあれば記入してください（その理由も含めて記入してください）思いつかなければ空白でも構いません」については、141名中50名が記載していた。内容には、「パソコンやMoodleに慣れておらず、完成してないのに、間違えて課題を出してしまったとき、もう一度課題を出せるよう、対応して下さった」、「Moodleのアクセス障害の際に課題提出期限を延ばしていただいたこと。アクセス障害前に提出できていてもいなくても先生が学生の学びを応援してくださっていることが実感できたため」等、オンライン授業に不慣れな点に対して、教員が柔軟に対応したことについての記述があった。また、「困ったことがあれば連絡できる場所が設けられていたので、いきなり遠隔授業でわからないことが多かった一回生にとって安心できるものでした」、「修学支援システムで課題についてのお知らせを毎回してくれたので忘れることなく課題に取り組むことができた」等、連絡体制に対する記述があった。さらに「最初のころは、課題をきちんと提出できているかなど不安を多く感じていたが、「全員提出できていました。」とコメントいただいたことが安心に繋がり、良かった」、「私たち学生

の毎回の課題に対してコメントをしていただいたことが良かったと思う。毎回の課題について、自分では十分納得した上で提出しているため、先生方からのコメントがなければ書いたことに対して満足して、そこで学びが終わっていたように感じる。しかし、先生方からのコメントがあったことで、自分の文章を読み返す機会ができ文章力の向上につながったと感じる」等、教員からのフィードバックに関する記述があった。

4. 考察

4.1. オンライン授業で用いる教材開発

学生の視聴環境や動画教材の形式、容量に配慮したが、学生の視聴環境により、一部の教材で動画が途切れることがあったとの記述があった。しかしながら、ほとんどの教材については、コンテンツを3～7分に短く分割してアップロードし、画質を落とし、データ容量を抑えたことで視聴に支障をきたすケースはなかった。

アクティブ・ラーニングの教材は文書のPDF教材であったが、学生自身の考えを付箋に記述し、KJ法の手法を用いて分類させ、思考を可視化させるワークを行うことで自分の理想とする教員像や大学生のうちにやりたいことが明確になり、新たな気づきが得られ、目標設定の重要性等が学べる授業とした。結果、授業内容等に対する満足度に関する質問項目「15.教科書や配布資料（PDF等）の内容や形式」では90%、「16.動画や音声教材の内容」への回答では86.5%の学生が満足・ある程度満足と回答した。また、自由記述でも「目標などを目に見える形にできてモチベーションが上がった」との意見が見られた。動画教材以外の方法でも学習を促進することができた。また、社会人として必要なマナーを学習する授業において、お辞儀の仕方や電話のかけ方等を学習する場合には、実演を撮影した動画を用いて、学生が画面を見ながら練習する教材が有効であった。

4.2. オンライン授業への適応支援

初めてMoodleを使用する学生に対して、授業開始前にログイン方法をマニュアルで周知し、実際にログインしてみることを課題とした（R.M.ガニユ、2007）。それにより、視聴環境の確認や技術的な困難の有無がわかり、電話等で個別にフォローアップすることで、全員が受講できる状況をつくるとともに、学習環境への適応困難な学生を早期発見・早期支援につなげることができた。授業方法に関する質問項目「4.授業を受講できていない学生への修学支援システムや電話掛けによるサポート」の結果を見ると、電話による個別のフォローアップの対象となった学生は55名の内、45名81.8%の学生が、「よかった」、「まあよかった」と回答しており、適応支援に効果的であったことが伺える。

質問がしやすいように、問い合わせ先を詳細に表示することで学生が迷うことなく、授業内容や提出物に関する質問ができ、「困ったことがあれば連絡できるところが設けられていたので、いきなり遠隔授業でわからないことが多かった一回生にとって安心できた」とのアンケート結果からも、解決までに無駄に時間を要することがなかったことが伺えた。また、質問項目において「3.オリエンテーションでは、Moodle コース受講マニュアル等が就学支援システムにより配布され、Moodle コースへ入るためのアクセスする練習機会が設けてあったこと」が87.2%、「5.課題の提出期限を朱書きにてコース内に目立つように記載されていたこと」は93.6%、「18.授業や課題への取り組み方についての説明」は90.8%の学生が肯定的に回答しており、適応支援として効果的であったと考える。さらに、「Moodleのアクセス障害の際に課題提出期限を延ばしていただけたこと。アクセス障害前に提出できていてもいなくても先生が学生の学びを応援してくださっていることが実感できた」等、オンライン授業に不慣れな学生の状況を加味して、柔軟に対応し学びの継続を支援する姿勢が、学生と教員の関係づくりに前向きな効果をもたらしたことが推察できる。

4.3. 適切なフィードバック

オンライン授業の成立要件である双方向性の確保はもちろんのこと、提出された課題へのフィードバックを、毎回の授業後に、Moodle コース上に総括コメントを返し、質問への回答についても記載した。授業方法に関する質問「8.振り返りシート提出を受け、教員から全体へのコメントやフィードバックがあったこと」を学生の93.6%が「よかった」、「まあよかった」と回答し、授業内容などに対する満足度については「19.課題や発言に対する教員からのフィードバック」に87.9%の学生が満足、ある程度満足と回答していた。

これら教員からのフィードバックには、自由記述において、「フィードバックを毎回書いていただいたおかげで、次のレポートの改善点がわかり、文章を向上させることができた。褒めてくださることもあったのでそれをみて次回も頑張ろうというやる気にもつながった」、「遠隔授業ということで、提出物についても詳しいコメントがいただける科目が少ない中、適宜アドバイスをいただけたので良かったです。具体的な改善点も把握することができ、また先生方が振り返りシートに目を通してくださっているという安心感があった」等、適切なフィードバックを行うことが、学生の学習意欲を高める（ジョン・ハッティ 2018）だけでなく、教員との信頼関係を構築することにつながったと考えられる（Parrish,P, 2008）。

4.4. 学習習慣の形成

新入生が初めてオンライン授業を受けるような場合、各々の自己管理能力に委ねるのではなく、授業開始直前に、教員から学生に向けて何らかの働きかけを行うことが効果的である。具体的には、授業開始直前に、教員が就学支援システムにログインし、学生から質問等のメッセージが届いていないかを確認するとともに、コース内に授業開始の挨拶と授業概要、課題の提出期限をメッセージとしてアップする等である。このように、学生が、一定の時間に授業を受けるように促すための対策を講じたことに対しての学生側の反応としては、「7.決まった時間、毎週授業時間（月曜日1限）に授業について連絡したこと」について92.9%の学生が、「よかった」、「まあよかった」と回答していた。また、「6.学習推奨機関が提示されていたこと」には87.2%の学生が「よかった」、「まあよかった」と回答し、自由記述中の、授業についてよかった点の記述として「授業が決まったタイミングで行われたこと」が記述されていた。

このように、学習期間を提示し、教員が学生の学習状況を把握することが有効であると考えられ、それは、授業後の提出物が、ほぼ全員提出できていたことから推察できる。ただし、このような対応は、大学に全く来ることができないまま授業が開始され、かつ初めてのオンライン授業であり、入学後、友人や教員との関係がまだ構築できていない状況であったこと等が影響して、このような細やかな対応が効果的なものとなったと考えられる。

5. まとめ

今回の、コロナ禍におけるオンライン授業の設計と実施において、一度も対面授業を受けることができないまま、オンライン授業を受講することになるという状況にあった。このような状況において、学生にできる限り不利益をもたらさず、大学生生活をスムーズにスタートできるように支援することは、学生の学習意欲を支え、対面授業が可能となるまでの学習の継続に有効であり、また、学生生活を充実させるための友人関係の構築や教員との関係性をつくり、大学での居場所の確保（帰属意識）に影響することを理解する必要がある（Parrish,P, 2008）。今回は、感染対策という避けられない理由によるフルオンライン授業となったが、オンライン授業の利点を実感しつつ、対面授業の効果や魅力についても再認識し、オンライン授業と対面授業、それぞれの良さが発揮できる授業設計となることを目指したい。今回、特殊な状況ではあったが、教員同士、外部講師、図書館等が知恵を出し合い、学生の置かれた状況に即した柔軟なオンライン授業が実施できたのではないかと考える。

引用文献

- Bersin,J. (赤堀侃司監訳) (2006), 「ブレンディッドラーニングの戦略」, 東京電機大学出版局
- ジョン・ハッティ (原田信之訳) (2018) 「学習に何が最も効果的か」, あいり出版
- Parrish,P.and Wilson,B.G. (2008), “A design and research framework for learning experience”, A paper presented at the 31st Annual Convention of the AECT, Orlando FL. [Available online] https://www.academia.edu/1141740/Learning_Experience_as_Transaction_A_Framework_for_Instructional_Design (参照日 2020.09.27)
- R.M. ガニエ, W.W. ウェイジャー, K.C. ゴラス, J.M. ケラー (鈴木克明・岩崎信監訳) (2007) 「インストラクショナルデザインの原理」, 北大路出版
- 鈴木克明 (2004), 「教材設計マニュアル」, 北大路出版

附記

本研究は、平成 30 年度～令和 4 年度文部科学省 JSPS 科学研究費 基盤研究 C (課題番号 18K02823) の補助を受けたものである。

